

P-21 ケセン語におけるサル表現と自他交替動詞の共起可能性再考*

Co-occurrence restriction of *sar(u)* expressions and transitive/intransitive verbs in Kesen revisited

新沼 史和・新沼 清歌

Fumikazu Niinuma and Sayaka Niinuma

盛岡大学・盛岡大学

Morioka University and Morioka University

北海道や北東北地域で使用されている、いわゆるサル表現は、自発の意味を有する助動詞であると言われている。また、自発の意味を表す日本語の「られ」とは異なり、サル表現は自動詞でも他動詞でも比較的自由に結合することができる。しかしながら、近年、サル表現と自他交替動詞との共起制限があることが明らかになった。これらの事実を踏まえ、新沼(2023)は、大橋(1963)や大槻(2014a, b)の考察を支持し、サル表現を形成する *asar* という自発助動詞が使役形態素 *as* と受動形態素 *ar* から成り立っているという主張を行った。そこで、本研究では、新沼(2023)では扱っていなかった、ケセン語独自の自他交替動詞におけるサル表現のデータを提示し、それらのデータが新沼(2023)の分析を支持する、ということを主張することを目的とする。この分析を通して、サル表現という形式と人間言語における自発表現との関連性について考察していきたい。

1. はじめに

いわゆるサル表現と言われる助動詞は、日本国内では、北海道、青森、岩手などの北東北で観察されているが、宇都宮や静岡などでも使用されているという報告がある(cf. 山崎(1994), 大槻(2014, 2015), 小松代(1976), 加藤(2000), 中田(1981)などを参照のこと)。この助動詞の意味は自発であると言われている。また、日本語の「られ」が自発を表す場合、心的な動詞に限定にされるのに対して、サル表現は、意味の制限がなく、また、自動詞、他動詞ともに結合可能である。

- (1) 雪 いっぺ 降らさる
snow many fall-SARU-present
“The snow falls a lot.”
- (2) 酒 いっぺ 飲まさる
Alcohol many drink-SARU-present
“A lot of alcohol can be drunk.”

しかしながら、サル表現が自他交替動詞と結合する場合に制限が見られる。例えば、新沼(2020, 2021)は、(3-4)のような例を提示し、(5)の一般化を提案した。

- (3) a. 集める(atsum-e-ru) — *集めらさる(atsum-e-(r)asar-u)
b. 集まる(atsum-ar-u) — 集まらさる(atsum-ar-asar-u)
- (4) a. 飛ぶ(tob-u) — 飛ばさる(tob-asar-u)
b. 飛ばす(tob-as-u) — *飛ばささる(tob-as-asar-u)
- (5) Generalization concerning the morpheme *asar-* and the intransitive verbs which have their transitive counterpart
a. The morpheme *asar-* can concatenate with the transitive verbs when the transitive marker is phonetically null.

b. Otherwise, the morpheme *asar-* concatenates with the intransitive verbs.

(Niinuma (2020))

これらの一般化から明らかなことは、自発助動詞 *asar-*は、どの動詞とも自由に結合できるわけではないこと、そして、自他交替動詞の場合、どちらか一方としか結合できないということである。(3)の制限に対して、Niinuma (2020, 2021)は、自動詞と結合するのが一般的であり、他動詞と結合するのがより特定の規則であると仮定し、Elsewhere Condition を用いた説明を行っている。

この研究を発展させ、新沼 (2023)は、ケセン語の自発表現との共起制限と、山形・福島方言における自発助動詞 *ar* との共起制限とを比較した。上でも述べた通り、ケセン語の自発表現は、例外を除き、ほとんどが自動詞と結合する。しかしながら、山形・福島方言においては、自発助動詞は、他動詞とのみ結合できる(cf. 森山・渋谷 (1988), 渋谷 (2006), 白岩 (2012))。これは、山形・福島方言の自発助動詞が無対他動詞とは結合可能であるということから考えても非常に興味深い。

- (6) a. 溶カサッテル／止メラッテル／乗セラッテル／乾カサッテル (他動詞)
 b. *溶ケラッテル／*止マラッテル／*乗ラッテル／*乾カッテル (有対自動詞)
 c. *弾マッテル／*光ラッテル／*響カッテル (無対自動詞)
- (7) 開ガッテル(開グ)／ツカッテル(ツク)／片付ガッテル(片付ク)／クツツカッテル(クツツク)／貼ツツカッテル(貼ツツク=貼リツク)／立ダッテル(立ズ)／並バッテル(並ブ)
 (白岩 (2012: 48))

- (8) このペンはよく書ガサル (ケセン語)
 (9) このペンはよく書ガル (福島方言: 白岩 (2012:36))
 (10) このペンは、すらすら書ガル (山形方言: 渋谷 (2006:54))

ここからわかることは、2つの自発助動詞、*asar* と *ar* は、単なる音韻的変異ではなく、その助動詞が持っている特性によって自他交替動詞との共起可能性が変化している、ということである。その考察に基づき、新沼 (2023)は、大橋 (1963)や大槻 (2014, 2015)の主張に従い、ケセン語における自発助動詞 *asar* が使役形態素の *as* と受身形態素の *ar* という2つの形態素が結合してできたものであると主張し、サル表現が自他交替動詞において他動詞を選択できないのは、2つの使役形態素が連続する、つまり、必異原理(Obligatory Contour Principle)に違反するからである、と述べている。

具体的に、ケセン語の自発表現の構造をNiinuma (2020,2021)に従い、自他交替現象を態に関する現象の1つとして捉え、自他交替のマーカ―が Voice に生成され、また、自発の形態素が VoiceP よりも上部の構造に生起する(11)の構造を仮定する。

- (11) [TP [PassiveP [CauseP [VoiceP [vP [root] v] Voice] *as*] *ar*] T]
 (12) a. [TP [PassiveP [CauseP [VoiceP [vP [ag] v] *ar*] *as*] *ar*] u]
 ag-ar-as-ar-u 上がらさる
 b. [TP [PassiveP [CauseP [VoiceP [vP [ag] v] e] (r) *as*] *ar*] u]
 *ag-e-(r)as-ar-u *上げらさる

また、自発の形態素が2つに分解されるという分析を採用しているため、*as* と *ar* をそれぞれ Cause head, Passive head という機能範疇であると仮定し、(12)の構造を考えてみよう。(12a)は、「上がる」という自動詞に自発形態素 *asar* が結合した構造である。この構造においては、使役形態素、受身形態素が交互に結合されている構造であり、必異原理に抵触しない。一方、(12b)は、「上げる」という他動詞に自発形態素 *asar* が結合した構造であるが、VoiceP にある使役のマーカ―と、*as* とい

う使役のマーカ―が2つ連続して結合している。この使役形態素の連続が、必異原理の効果により、容認不可能となっている、という分析である。

一方、山形方言と福島方言の自発表現について考えてみよう。ケセン語の自発表現との決定的な違いは、自発形態素が *asar* ではなく、*ar* だけである、という点である。つまり、大橋 (1963) や大槻 (2014, 2015) の分析を援用すれば、山形・福島方言の自発表現は、受身の *ar* のみ、ということになる。このことを仮定し、次の構造を考えてみよう。

(13) [TP [PassiveP [VoiceP [vP [root] v] Voice] *ar*] T]

(14) a. [TP [PassiveP [VoiceP [vP [ag] v] *ar*] (r) *ar*] T]

**ag-ar-ar-u* *上がらってる / 上がる

b. [TP [PassiveP [VoiceP [vP [ag] v] e] *ar*] T]

ag-e-rar-u 上げらってる / 上げらる

(13)の構造を仮定して、(14a)の自動詞と自発助動詞が結合できない理由を考えてみると、自動詞マーカ―である *ar* と受身形態素 *ar* が連続していることがわかる。したがって、必異原理によって排除されることになる。一方、(14b)においては、他動詞マーカ―である *e* であるため、必異原理が働かず、結果として適格ということになる。

これらの分析を踏まえ、本研究では、次の研究課題に取り組む。

(15) 研究課題

- a. 1つの他動詞に対して、2つの自動詞が存在する(いわゆる *verb triplets* (cf. Oseki (2017)) 場合、2つの自動詞に自発助動詞は結合できるのだろうか？
- b. ケセン語独自の自他交替動詞があるが、その場合、どちらの動詞に結合するのだろうか？

本調査の意義は、ケセン語における自発助動詞の内部構造の解明である。自発といわゆる *anticausatives* との関連性について様々な調査・研究があるが、自他交替動詞との共起制限を詳細に検討することにより、その内部構造を解明し、人間言語が自発という意味をどのように表現するのか、ということについて明らかにしていきたい。

本稿で扱うのは、ケセン語である。ケセン語とは、岩手県沿岸南部にある大船渡市、陸前高田市、住田町で話されている言葉のことであり、医師である山浦玄嗣先生が名付けられた。ケセン語に関する文献については、山浦 (1989, 2000, 2006) を参照されたい。

2. ケセン語のデータ1

岩手県宮古市方言を詳細に記述した坂口 (2012) によると、アク「開く」には2つの自動詞形があり、(16)と(17)に示すように、そのどちらにもサル表現が共起可能であるという報告がある。このデータは、ケセン語でも同様である。一方、(18)のように、アク「開く」に対応する他動詞アゲル「開ける」には、自発自動詞は結合できない。

(16) 開く: アク (*ak-u*) アカサル (*ak-asar-u*)

(17) 開かる: アカル (*ak-ar-u*) アカラサル (*ak-ar-asar-u*)

(18) 開ける: アゲル (*ag-e-ru*) *アゲラサル (*ag-e-(r)asar-u*)

また、(19-20)のように、2つの自動詞にサル表現が結合するものも存在する(高橋英也(*personal communication*))が、(21)に示すように、その他動詞形には自発自動詞は結合不可能である。

- (19) 伝う:ツタウ (tsutaw-u) ツタワサル (tsutaw-asar-u)
 (20) 伝わる:ツタワル (tsutaw-ar-u) ツタワラサル (tsutaw-ar-asar-u)
 (21) 伝える:ツタエル (tsutaw-e-ru) *ツタエラサル (tsutaw-e-(r)asar-u)

新沼 (2023)の分析によると、(13)の構造のように、Voice が自動詞マーカ―であれば必異原理に抵触しないため、適格であると予想する。上記のデータの適格性は、この予測が正しいことを示している。

- (13) [TP [PassiveP [CauseP [VoiceP [vP [root] v] Voice] as] ar] T]

3. ケセン語のデータ2

坂口(2012)は、岩手県宮古方言独特の自他交替動詞の例を提示し、そのどちらも自発自動詞「サル」と結合可能である、と論じている。このデータは、ケセン語でも同様である。一方、(32)のように、マク「撒く」と語根を同じくするマケル「撒ける」には自発自動詞は結合を許さない。

- (22) 書く:カク (kak-u) カカサル (kak-asar-u)
 (23) 書かる:カカル (kak-ar-u) カカラサル (kak-ar-asar-u)
 (24) 漬く:ツク(tuk-u) ツカサル (tuk-asar-u)
 (25) 漬カル:ツカル(tuk-ar-u) ツカラサル (tuk-ar-asar-u)
 (26) 抱く:ダク (dak-u) ダカサル (dak-asar-u)
 (27) 抱かる:ダカル(dak-ar-u) ダカラサル (dak-ar-asar-u)
 (28) 撒く:マク (mak-u) マカサル (mak-asar-u)
 (29) 撒かる:マカル (mak-ar-u) マカラサル (mak-ar-asar-u)
 (30) 撒かす:マカス (mak-as-u) *マカササル (mak-as-asar-u)

上記のデータより、これらのデータは、新沼 (2023)の分析が予測した通りの結果であることがわかる。新沼(2023)は、ケセン語の自発自動詞 *asar* が使役の *as* と受身の *ar* という2つの機能範疇に分解され、他動詞マーカ―が音形をもつ場合、使役が連続することから、OCP に抵触するため不適格となるという分析を行った。従って、(32)は、*as* が他動詞マーカ―であるため、容認されず、一方それ以外は、自動詞マーカ―もしくは音形を持たない他動詞マーカ―であるため、容認可能である。

4. 議論

本研究では、以下の2つの研究課題について考察を行った。

- (15) 研究課題
- a. 1つの他動詞に対して、2つの自動詞が存在する(いわゆる verb triplets (cf. Oseki (2017))の場合、2つの自動詞に自発助動詞は結合できるのだろうか？
 - b. ケセン語独自の自他交替動詞があるが、その場合、どちらの動詞に結合するのだろうか？

(15a)については、2つの自動詞と共起できるということが明らかになった。また、(15b)については、自動詞・他動詞両方と結合することができるということがわかった。これらの結合可能性について、本研究では、新沼 (2023)の分析を用いて説明を行った。

本稿における、ケセン語の自発助動詞 *asar* が使役形態素と受身形態素の結合から形成されているという主張は、一見矛盾しているように見える。なぜなら、自発は、外項を抑圧するという点において受身と親和性があり、項を導入する使役とは相反するものであるからである。また、山形・福島方言において、*ar*のみで自発表現になっているということを考えると、自発の意味を生み出すものは、*ar*のみで十分であり、使役形態素の役割が明らかではない。実際、並木 (2022)は、*as* が外項を導入し、*ar* が外項を抑圧すると論じているが、*as* がない山形・福島方言の自発表現をどのように生み出すのかという問題が残ると思われる。

世界の言語において、自発がどのように具現化されるのかについて、anticausatives と関連があるという見方が一般的である。例えば、ギリシア語では、Anticausatives は、reflexives や passives そして middles と関係があると言われている(cf. Alexiadou (2010))。実際、柴谷 (2000)は、自発が中相から派生される可能性について論じている。しかしながら、Inglese (2022)は、anticausatives が各言語において、どのように派生されたのか詳細に調査し、reflexives だけではなく、*be*, *become* や *come* などの自動詞、*do* や *say* などの他動詞、statives を表すマーカーや名詞化、そして、受身や使役などから派生されている、と論じている。

日本語の「られ」を考えてみても、受身と自発には親和性があることがよくわかっているため、ここでは大きな問題ではないと思われる。本研究において、特に興味深いのは、使役から派生された anticausatives である。Malchukov and Nejdalkov (2015: 608-612)は、ツングース語族である Evan と Evanki の anticausative marker について、派生のシナリオとして、ツングース語族の *-bu* が動詞の”give”であり、そこから使役マーカーとなり、その後、受身へ変化し、そこから anticausative が生まれたという。また、韓国語について、Yap and Ahn (2019)は、韓国語の *-i* が使役、anticausative、そして、受身の役割を果たすことを述べた上で、韓国語の *-i* については、使役から被使役主の削除などにより自動詞へと変化し、直接 anticausatives の役割が生まれたのではないかと論じている。

Malchukov and Nejdalkov (2015)、そして、Yap and Ahn (2019)の議論が正しければ、使役マーカーが何らかの変化を経て anticausative となり、結果として自発の意味を持つようになったという派生の変遷は間違っていないように思われる。また、ツングース語族とアルタイ語族が言語学的に類似した特性を持っているということを考慮しても、正しい方向性を示しているように思われる。この方向性が正しいとすると、ケセン語の自発助動詞 *asar* の *as* は、使役から、使役の一部の役割を有しながら、anticausative marker へ変化した、ということになる。つまり、使役接辞の主な役割である、外項を導入することは一切しないものの、すべての使役の役割が無くなったわけではなく、OCP に抵触する役割だけは保持しているということになる。

(13) [TP [PassiveP [CauseP [VoiceP [vP [root] v] Voice] *as*] *ar*] T]

従って、本研究は、*as* を使役マーカーとし、外項を導入するといった役割を持つと論じている並木 (2022)の分析とは異なっている。

最後に、Niinuma (2020)でも論じたが、他動詞マーカーが音形を持たない場合には、他動詞と結合する。従って、自動詞マーカーが *ar* であっても(31-32)のように許されない。しかし、このデータは、(22-29)のデータとは異なっている。

- (31) a. はさむ (hasam-u) はさまさる (hasam-asar-u)
 b. はさまる (hasam-ar-u) *はさまらさる (hasam-ar-asar-u)
- (32) a. またぐ (matag-u) またがさる (matag-asar-u)

b. またがる (matag-ar-u) *またがらさる (matag-ar-asar-u)

この点に関する実態の解明は、今後の詳細な調査を待つ必要があるが、1つの方向性として、語根の音節の差が考えられる。(22-29)で自動詞・他動詞両方と結合できる場合、語根が1音節になっているのに対し、(31-32)においては、2音節になっているという違いがある。

参照文献

- Alexiadou, Artemis (2010) “On the Morphosyntax of (Anti) causative Verbs,” *Lexical Semantics, Syntax, and Event Structure*, ed. by Malka Rappaport Hovav, Doron and Ivy Sichel, 177-203, Oxford University Press, Oxford.
- Haspelmath, Martin. (1990) “The Grammaticalization of Passive Morphology,” *Studies in Language* 14 (1), 25-72.
- Inglese, Guglielmo (2022) “Cross-Linguistic Sources of Anticausative Markers,” *Linguistic Typology at the Crossroads* 2-2, 127-186.
- 加藤昌彦 (2000) 「宇都宮方言におけるいわゆる自発を表す形式の意味的および形態統語的特徴」『国立民族学博物館研究報告』25 巻 1 号, 1-56.
- 小松代融一 (1976) 『岩手方言の音韻と語法』岩手方言研究会, 岩手.
- Malchukov, Andrej and Igor V. Nedjalkov (2015) “Valency Classes in Even (North Tungstic) in a Comparative Tungusic Perspectives, ed. by Andrej Malchukov and Bernard Comrie, *Valency Classes in the World’s Languages*, 1, 571-627, de Gruyter, Berlin/New York.
- 森山卓郎・渋谷勝己 (1988) 「いわゆる自発について— 山形市方言を中心に—」『国語学』152, 47-59.
- 中田敏夫 (1981) 「静岡県大井川流域方言におけるサル形動詞」『都大論究』18, 東京都立大学国語国文学会 1-13.
- 並木翔太郎 (2022) “ラサル文における結合価減少と格表示—非意図用法を中心に—” 札幌市立大学研究論文集 16, 3-12.
- Niinuma, Fumikazu (2020) “*Sar(u)* Expression and Transitive/Intransitive Alternation in Kesen,” 『盛岡大学紀要』37, 9-22.
- Niinuma, Fumikazu. (2021) “Argument Realization and *Sar (u)* Expression in Kesen,” 『盛岡大学紀要』38, 13-31.
- 大橋勝男 (1963) 「栃木県における助動詞『さる』」『栃木県高校国研国語』3, 84-92.
- Oseki, Yohei (2017) “Voice Morphology in Japanese Argument Structures,” ms., New York University.
- 大槻知世 (2014) 「青森県津軽方言の接尾辞『サル』」日本言語学会第 149 回大会予稿集.
- 大槻知世 (2015) 「青森県津軽方言の自発形式」Luncheon Linguistics 口頭発表資料, 東京外国語大学, 4 月 22 日.
- 坂口忠 (2012) 『ことばのおくら』文化印刷, 岩手.
- 柴谷方良 (2000) 「ヴォイス」『日本語の文法 1— 文の骨格』, 仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人(著), 117-186, 岩波書店, 東京.
- 渋谷勝己 (2006) 「第 2 章 自発・可能」『シリーズ方言学 2 方言の文法』, 小林隆・佐々木冠・渋谷勝己・工藤真由美・井上優・日高水穂(編著), 47-92, 岩波書店, 東京.
- 白岩広行 (2012) 「福島方言の自発表現」『阪大日本語研究』24, 35-53.
- 高橋英也 (2015) 「東北・北海道方言におけるラサル形式の形態統語論について」南山大学大学院人間文化研究所言語科学専攻主催言語学講演会ハンドアウト, 6 月 12 日.

- 山浦玄嗣 (1989) 『ケセン語入門』共和印刷企画センター, 岩手.
山浦玄嗣 (2000) 『ケセン語大辞典』無明舎出版, 秋田.
山浦玄嗣 (2006) 『ケセン語の世界』明治書院, 東京.
山崎哲永 (1994) 「北海道方言における自発の助動詞: *-rasaru* の用法とその意味分析」『ことばの世界: 北海道方言研究会 20 周年記念論文集』, 小野米一(編), 227-237, 北海道方言研究会, 北海道.
Yap, Foong Ha and Mikyung Ahn (2019) “Development of Grammatical Voice Marking in Korean: On the Causative, Middle and Passive Uses of Suffix *-i*,” *Lingua* 219, 1-23.

*本稿の執筆にあたって示唆をくださった牧秀樹先生に感謝いたします。本稿のすべての不備は執筆者自身のものである。

連絡先メール住所: Fumikazu Niinuma <niinuma@morioka-u.ac.jp>